

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：12601

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2016～2019

課題番号：15KK0038

研究課題名（和文）中国農村のお喋りとその伝播から記憶を再考する（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Rethinking of Memory From The Research of Chatting and Its Transmission in Rural Shanxi China(Fostering Joint International Research)

研究代表者

石井 弓 (Ishii, Yumi)

東京大学・大学院情報学環・学際情報学府・特別研究員

研究者番号：50466819

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 8,800,000円

渡航期間： 23ヶ月

研究成果の概要（和文）：Oxford大学で開催された2度の国際学会へ参加し、日中戦争の記憶及び物語『趙氏孤児』のヨーロッパへの伝播と農村の関係について、英語圏の研究者へ向けて発表した。また、世界各地の研究者が集まる研究会やワークショップに積極的に参加し、英語圏での中国研究及びヨーロッパの啓蒙期の研究把握に努めた。更に今後の共同研究のため、歴史、モダンアート、文化人類学、女性史といった多様な分野の研究者と交流し、3つのテーマについて学会発表や共同研究の計画を進めてきた。その間、論文執筆を行い、「戦争記憶をめぐる再帰的な歴史実践」論文が『パブリック・ヒストリー入門』（勉成出版、2019）にて出版された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語圏における中国研究は、主に中国人研究者によって担われている。このため日中戦争の記憶は中国国内の視点から論じられる傾向があり、アジアにおける複雑な戦争記憶は問題化されにくい。このため、日本人の中国研究者が、日中戦争の最前線で行ったオーラルヒストリー調査をもとに記憶の問題を英語で論じ世界に発信していくことは、社会的にも学術的にも重要である。加えて、世界では、現在戦争中の国、新兵器による大量虐殺、ジェノサイドなど多様な戦争があり、それらの記憶との繋がりを考えることで、戦争記憶研究が世界的な連関を持ったひとつのテーマとなり得る。本研究はその基礎を築いたと言える。

研究成果の概要（英文）：As a visiting fellow of the University of Oxford, I made two presentations in international conferences and discussed my research topics of Memory of the Sino-Japanese War and transmission of "Orphan of Zhao" with European researchers. I also joined actively in international workshops and talks to get careful grasp of the situation of China studies and Enlightenment studies in Europe. In order to develop international joint research, I conducted research exchanges with researchers of various fields, such as History, Modern Art, Anthropology and Women's History, then has planned panel presentation for international conferences and joint research in 3 themes. I also progressed article writing and published "Sensoukioku Wo Meguru Saikitekina Jikojissen: Oraruhisutori Wo Meguru Tasharikai to Jikorikai (Recurring Historical Practices Over War Memories: Others Understanding and Self-understanding in Oral History)" in the book "Paburikku Hisutori Nyumon (Introduction to Public History)".

研究分野：中国オーラルヒストリー研究

キーワード：記憶論 東西交流史 戦争記憶 中国近現代史 記憶と歌 歴史と記憶 オーラルヒストリー コミュニティ論

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

私はこれまで、中国山西省孟県でのオーラルヒストリー調査によって日中戦争の記憶の掘り起こしを行い、その共有（集合的記憶）について調査・研究を進めてきた。その過程で、村内で歌われる「順口溜」と呼ばれる歌に着目し、素朴な歌を通じて村の中で受け渡される戦争記憶の内容と継承について論じた。また、同内容の「順口溜」が共有される地域を、「お喋りのコミュニティ」として見出し、「集合的記憶」の範囲を実際の地図上に示すことに成功した。これらの研究は『記憶としての日中戦争 インタビューによる他者理解の可能性』（研文出版、2013）として出版している。また、このお喋りのコミュニティが雨乞いを共同で行う地域と重なっていることが明らかになったことから、伝統的な活動にかかわる記憶とコミュニティについて、研究を掘り下げている。孟県で行われる雨乞いは2000年以上前の歴史・物語『趙氏孤児』（史記、左氏伝に記載）を起源とし、雑劇、京劇、晋劇として広く知られるこの物語と関連しつつ激動の中国史を生き抜いてきた。ここから、物語が織りなす歴史、記憶、コミュニティという新しい視座からこれまで見出して来た戦争記憶を見返すことによって、この地域の歴史や物語と人々の思考の関連性について考察を進めた。

『趙氏孤児』はまた、18世紀にイエズス会宣教師によってフランスに伝えられヴォルテールの翻案によってパリで上演された。それはイギリス、ドイツ、イタリアへも伝わり、18世紀のヨーロッパで最も受容された中国演劇となった。物語が織りなす歴史と記憶は、中国農村から始まり18世紀という近代化の時期に世界各地に広まる様相を呈しており、東西交流、中国イメージの受容、そして近代化を論じる切り口として、『趙氏孤児』の研究が世界的な歴史の問題を取り扱う可能性を有することが見出された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまでの中国農村部における調査研究を、事例研究の枠を超えて世界的なアカデミズムの問題関心に繋げることであり、日中戦争の記憶の研究や『趙氏孤児』の伝播について、研究交流を行う中から核となる論点や理論を見出していく。

物語『趙氏孤児』が18世紀ヨーロッパへ伝播し広く受け入れられたことから、特にイギリス、フランスでの調査を行い、18世紀ヨーロッパの歴史、文化、社会的な背景も含めて、中国農村に端を発する物語がなぜ、どのようにヨーロッパの人々に受け入れられたのか、特に、「啓蒙期」や「長い18世紀」と称されるヨーロッパの18世紀は、ヨーロッパの現在の自己像形成期にあたることから、他者としての中国と、他者が映し出すヨーロッパの自己像についても、物語の翻案やその受容の分析を通して掘り下げしていく。そうすることによって、ミクロな地域での物語の役割を、グローバルヒストリー、トランスナショナル・ヒストリーといった新しい歴史学研究の方法と結びつけ、より広い聴衆に向けて発信していくと同時に、これらヨーロッパ発の歴史学の方法論を、中国農村の視点から問い直していく。また、日中戦争の記憶に関する研究蓄積を発表して、英語圏の多様な戦争記憶研究と問題意識を共有する。

3. 研究の方法

イギリス、オックスフォード大学のHenrietta Harrison教授(中国近現代史)と連絡を取り、教授に受け入れてもらう形でオックスフォード大学での訪問研究を行った。Harrison教授は中国山西省という私と共通のフィールドで調査を行いながら、地方史、華北農村、宗教、外交、そして革命経験といった幅広いテーマについて、オーラルヒストリーと史資料を組み合わせた研究を行ってきた。近年ではその興味関心を、中国農村から眼差したトランスナショナル・ヒストリーや中国とヨーロッパの相互作用に広げている。農村から「ヨーロッパ」や中国近現代史を再考するという視点は申請者が目指す研究の方向性と一致することから、教授との議論の中からヨーロッパの研究の視点や方法論を取り入れて来た。また、研究会やシンポジウムへの参加によって、英語圏における中国研究の傾向や内容を把握し、これまで行ってきた中国農村での戦争記憶、コミュニティ論、歌と記憶の研究は、どういう形でヨーロッパアカデミズムの問題関心と繋がるのかについて考えて来た。これと並行して、申請者自身のこれまでの研究状況について報告し、共同研究の有効性を提案してきた。

史料収集として、ヨーロッパへ伝播し上映された『趙氏孤児』に関する資料を、イギリスオックスフォード大学Taylor's図書館、ロンドン大学東洋アフリカ研究所(SOAS)図書館、フランス国立図書館で収集した。

なお、イギリスはオーラルヒストリーが盛んであることから、ロンドン大学内に本部があるOral History Societyの学会や研究会に参加し方法論の吸収に努めた。

4. 研究成果

研究会、学会発表

2018年度にはオックスフォード大学で開催された国際学会、Memories of World War : China and Europe に招聘され、“Multilayered Memory of Sino-Japanese War (抗日戦争記憶的多層性:以漢奸的記憶為中心)”と題する発表を英語及び中国語で行った。これまで行ってきた戦争記憶の研究は、日本国内では評価されていたが、本発表では中国語及び英語圏の研究者からも高い評価を得ることができた。また、オックスフォード大学で開催される、Mandar in Forumへの招聘講演にて、Memory of the Sino-Japanese War: Society, Story and Self-identity in oral

history と題する発表を行った。これは戦争記憶が共有されるコミュニティに関する発表であり、『趙氏孤児』とコミュニティの関係性や日本人が中国で聞き取り調査を行う際のアイデンティティの問題についても議論した。会場は溢れるほどの聴衆が集まり、多くの質問が寄せられたことから、中国農村におけるオーラルヒストリー研究がヨーロッパでも広く関心を持たれていることが理解された。本発表によって複数の研究交流が進むこととなった。

2019 年度にはイギリスで開催される国際学会 The British Association for Chinese Studies (4-6, September 2019 at Edinburgh University) 及び Oral History Society (OHS, 5-6 July 2019 at Swansea) へ参加し、ヨーロッパのオーラルヒストリー及び中国研究の研究状況の把握につとめた。また、2020 年 8 月にドイツライプニッツ大学で開催される国際学会 European Association for Chinese Studies (EACS) へ個人発表を投稿し採択されている(コロナウイルス拡大のため、2021 年に延期)。

研究会への参加

オックスフォード大学 China Centre では、世界各地の多様な専門の中国研究者が集まりシンポジウムやワークショップが頻繁に開催されている。これらに積極的に参加することによって英語圏の中国研究の把握に努めた。その中で特に注目されたのが、中国に関するポスターや写真、過去に使用された日用品などといったオブジェクトやマテリアルに対する興味関心の高さである。従来、思想、歴史史料、そして人の動きによって研究されてきた中国近現代史や東西交流史について、オブジェクトやマテリアルに注目し、物質世界が精神世界を形作るという視点から研究が進められていた。これについては今後も注視し、自身の研究に取り入れていきたいと考えている。

滞在期間中には、Voltaire Foundation で毎週開催される Enlightenment Workshop に参加し、ヨーロッパにおける啓蒙期(18 世紀)の研究及び社会状況について学んだ。同ワークショップにはヨーロッパ各地から啓蒙期に関する研究者が集まり、政治、思想、社会、歴史など多様な分野の、或いはそれらを融合させる形での研究発表が行われていた。そこでは様々な気づきを得たが、特に 18 世紀という時期が、現在を生きるヨーロッパの人々にとって、自分たちと直接繋がる最も遠い過去でありながらも、現在からでは容易には想像できないような世界観を持っていたと感じられていること、そして社会変化が急速に進む現在、人々のアイデンティティは変容しつつあり、18 世紀という原点に立ち返って再確認することが求められていることが強く感じられた。そのような時期における中国の影響の大きさもまた、再確認・再評価される傾向があった。当時、ヨーロッパというアイデンティティが形成されるにあたり、その他者としてイスラム社会やアフリカ、中国という地域の存在が必要とされたためであり、『趙氏孤児』の受容と伝播も、そのような社会的背景の中に置いて考える必要があることが確認された。

論文執筆

期間中には、日本語論文「戦争記憶をめぐる再帰的な歴史実践——オーラルヒストリーによる他者理解と自己理解」の論文を執筆し、菅豊・北條勝貴編著『パブリック・ヒストリー入門』(勉成出版、2019)に収められた。また、英語論文 Memories of Collaborators with Japan in the Second Sino-Japanese War の執筆を続けて来た。これは未完成であるが、イギリスでの研究活動で得た知見を踏まえて完成させ、国際的なジャーナルへ投稿する予定である。

資料収集

史料収集は、Oxford 大学 Taylor 's Library, London 大学東洋アフリカ研究所(SOAS)図書館、フランス国家図書館にて主に英語、フランス語の資料にあたり、主に 18 世紀啓蒙期の『趙氏孤児』翻案、当時の評価、仏語と英語翻案者であるヴォルテールとアーサー・マーフィーの書簡、そして宣教師資料を収集した。

共同研究

2019 年度は今後の共同研究に目を向けて他の研究者との研究交流を積極的に行ってきた。その結果、3 つのテーマについて共同での学界発表や研究の計画を進めることができた。ひとつは、Annie Hongping Nie 氏(University of Oxford)、Park Sang-Soo 氏(Korea University)そして Chan Yang 氏(Shanghai Jiaotong University)と共に "Sino-Japanese (Anti-Japanese) War and Its Memory: Family, Community, and Competing Nationalism" をテーマとして国際学会でのパネル発表を計画している。このパネルでは、これまでアジアの中で客観的に論じることが難しかった日中戦争の対日協力というテーマを、日中韓三国の研究者と議論し掘り下げようとするもので、英語圏の学会で報告することによって、アジアにおける戦争記憶の問題をより広い世界に向けて発信し問題化していくことを目指している。次に、モダンアートを専門とする Jing-Joon Lee 氏(University of Oxford)と、「歌と記憶」をテーマとして共同で発表と論文執筆を進めている。Lee 氏は広島におけるフィールドワークをもとに不可視の記憶の積み重なりを、都市の景観の中に表現するというモダンアートの作品を発表してきた。彼にとってモダンアートは、いわゆる「芸術」ではなく、文化人類学と哲学であるという。歴史学を専門と

する私がモダンアートという全く異なる分野の研究者と共同で歌と記憶について議論し考えることは新しい挑戦である。しかしながら、Lee 氏とは集合的記憶の捉え方や記憶分析の方向性で共通する点が多く、彼との議論によって、これまでの自身の研究が包含しながら表現できていなかった問題点や切り口が明確化される。共同での論文執筆によって新しい視点から記憶研究を深化させることができるのではないかと考えている。最後に、Maria Jaschok 氏 (University of Oxford) と、中国における歌と歴史について、共同での学会発表を計画している。Jaschok 氏は、中国におけるムスリムの女性史を研究しており、読み書きがままならない女性たちに、アッラーの歴史及び中国のムスリムの歴史を教え伝える歌を聞き取り、研究を進めてきた。これは「順口溜」という短い歌に歌われる戦争記憶を対象としてきた私の研究と多くの点で繋がっている。特に文字に残すことができないマイノリティーの歴史が、中国で如何に伝えられるか、また国家の「歴史」には描かれない如何なる歴史が、マイノリティーの間で伝えられているのかについて、歌という伝承手段に着目して考えていこうとする研究方針を共有している。彼女との話し合いは始まったばかりであるため共同研究はまだ具体化されていないが、中国における歴史と記憶の問題を、ムスリムや農民といったマイノリティーの視点から歌というアスペクトを用いて議論することは、歴史的な発見及び理論の双方において重要な役割を果たすことができる。これらの議論や話し合いを通じて、アジアの戦争記憶の問題を、日本人の視点から英語で発表していくことの重要性を再確認した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Yumi Ishii
2. 発表標題 Multilayered memory of Sino-Japanese war (抗日戦争記憶の多層性：以漢奸の記憶為中心)
3. 学会等名 International conference of Memories of World War : China and Europe in University of Oxford (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yumi Ishii
2. 発表標題 Memory of the Sino-Japanese war: Society, Story and Self-identity in oral history (歴史、記憶、故事：從抗日戦争の記憶到《趙氏孤兒》)
3. 学会等名 Mandarin Forum at the University of Oxford (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yumi Ishii
2. 発表標題 Orphan of Zhao: A Story and the Dynamism of Village Community in Shanxi China
3. 学会等名 European Association for Chinese Studies (EACS) (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 菅豊、北條勝貴	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 512
3. 書名 パブリック・ヒストリー入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	ハリソン ヘンリエッタ (Harrison Henrietta)	オックスフォード大学・Oriental Studies・Professor	
その他の研究協力者	クロンク ニコラス (Cronk Nicholas)	オックスフォード大学・Voltaire Foundation・Professor	
その他の研究協力者	聶 洪萍 (Nie Annie Hongping)	オックスフォード大学・School of Interdisciplinary Area Studies・Research Associate	
その他の研究協力者	ジンジュン リー (Lee Jinjoon)	オックスフォード大学・The Ruskin School of Art・DPhil Candidate	